
テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー 3 ~ 龍は閃光のように・・・ ~

颯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー3 龍は閃光のように・・・

【Nコード】

N9968Z

【作者名】

颯

【あらすじ】

世界中の守り手、‘デイセンター’、太古より予言されていたそれは、世界を守護するために現れる・・・

「世界樹」とその「世界樹が生み出したとされる星晶」というエネルギー鉱物で発展を続ける世界、ルミナシア

しかし、星晶の力で産業が発展する国々がある一方で、それらの国から植民地化を強要されたり、恵みを奪われる国もありました・・・

空を駆ける船、バンエルティア号を拠点に活動するギルド「アドリビトム」の面々は、そういった恵みを奪われる人々を助けるために活動をしています。

ある日、アドリビトムに所属する少女カノンノは、空から落ちてきた主人公カイトと、光の中から現れたシュウ・・・彼等には自分の名前以外の記憶がなく、目的もわかりません。行く当てのないかれらはカノンノに連れられ、アドリビトムに入ります。

新たなレディアントマイソロジーをお楽しみください。

プロローグ 始まり

????

『ゴオオオアワアアアアツ!!!』

4本の足に翼を生やした赤い竜の咆哮が……この場所に響き渡った……

たくましかった翼はボロボロでもう空も飛べない……角は半ばこころから折れ、前両足と右後ろ足は爪が折れ、尻尾は切断されていて、もう戦えるような状態ではない……

????

「こんなものか……太古の世界……ルミナシアーの力をもったドラゴンといってもこの程度……」

その竜をこのような姿まで追い込んだ……いや、まるで玩具の様に遊んだ人……いや人ではない。体には水晶のようなものをたくさんつけ、髪の色は白く毛先だけが青い……左目は大きな貝で覆い尽くされ、右頭部には螺旋状に渦巻く貝がついている。

????

「とどめだ……世界創造のメルト!!!」

彼を中心に花のような魔方陣のようなものが展開され炎、氷、雷等の連続の攻撃が竜を襲った……

『ガアアアアアアアアアアツ!!!?』

竜は攻撃をたてつづけに受け、吹きとんだ。

そして壁であろう部分に叩きつけられ、その壁が破壊した……

どうやらこの場所は高いところにあるようだ……ピクリとも動
かず海面へと落下していった。

???

「……仕留め損ねたか……まあいいだろう、この高さだ……海面にたたきつけられて死ぬだろう。」

そうして彼は闇へと消えていった……

プロローグ 落下

三人称 side

カノンノ

「今日は世界樹がよく見えるね・・・」

ピンクの髪のかわいらしい少女がたずねる。

ロックス

「ええ。何かいいことがあるかもしれませんね。」

空を2枚の羽を器用に使って飛んでいる小さな生物が答えた。

カノンノ

「うん。」

ロックス

「ん？あれは・・・」

カノンノ

「どうしたの？ロックス」

ロックス

「いえ・・・あれはいつたい・・・」

ロックスが見ていたほうにカノンノは向くそのには・・・

???

「うわああああああ」

カノンノ

「ん？つてあれ人？」

ロックス

「こつちに落ちてきています！！」

カノンノ

「キヤアアアア！！」

『ドスン……』

仰向けになって落ちてきたのは少年だった……。まずはじめに目に入ったのは髪色……。まるですべてを燃やすような……。でもどこかに冷たさを覚える蒼い髪……。服は黒いジーパンに白のシャツ、そのうえに赤と黒のチャックの服を羽織って、そのうえに黒のフード付のロングコートを着ていた……。そして背中には見たことのないような剣が提げられていた。

カノンノ

「……。ロ、ロックス。急いで医務室に連れて行くよ。」

ロックス

「か、かしこまりました。」

数時間後

???

「……つう……くう。ウワアアアアア！」

カノンノ

「キヤア！」

???

「はあ……はあ……はあ……ここはどこだ？」

アニー

「あ、ようやく目が覚めたのね。ここは医務室ですよ……展望台で倒れていたあなたを見つけてここで治療していたの。」

???

「あ、ありがとう。」

アニー

「お礼なら今あなたの奇声に驚いたこの子に言ってちょうだい。倒れていたあなたをここまで運んでくれたの。」

???

「え？あ、ごめん。君が俺を？」

カノンノ

「うん。私の名前はカノンノ。カノンノ・グラスバレーよ。あなたは？」

カイト

「俺はカイト、カイト・バナージ。さっきはありがとうな。」

カノンノ

「ううん。気にしないで。」

そんな会話をしているとアニーが、

アニー

「あなた、すごい怪我をしていたのよ？しかも空から落ちてくるし……」

カイト

「空から？怪我……って本当だ。」

突然青い髪の女の人が入ってきた。

アンジュ

「あら？目が覚めたのね？私はアンジュ、この船のリーダーをしているわ。」

ロックス

「僕はこの船でコンシェルジュで、ロックスプリングスと申します。ロックスとお呼び下さい」

アニー

「あら。申し後れました。私は医務室でお手伝いさせていただきます、アニー・バースと申します。」

カイト

「俺はカイト・バナージだ。」

アンジユ

「ところであなた何者？空から落ちてきたってのも気になるし……」

カイト

「え？俺は……あれ、俺は……」

アンジユ

「？どうしたの。」

カノンノ

「もしかして記憶が……」

カイト

「ああ……みたいだ……何も思い出せない。」

アンジユ

「そう。なら仕方ないわね。記憶の無い状態でどこかの街に出したら、それこそ危険ですもの」

アンジユは少し考える仕草を見せると何か思い付いたようにカイトへと向いた。

アンジユ

「……そうね。なら、記憶が戻るまでこのギルドで働かない？働いてさえくれれば、ちゃんと衣食住ついた待遇をするわよ」

カイト

「ギルド？」

アンジユの言葉にここにいた全員が驚く。

アンジユ

「ええ。いろいろなギルドがあるけど、このギルドは、人を助けるのを目的としたギルドよ。」

カイト

「俺が・・・人を・・・助ける・・・」

アンジユ

「そう。」

カイトが下を向いて考えているとカノンノが元気そうにカイトに迫ってきた。

カノンノ

「そうだよ。一緒に働かない？まあここに入るために入団テストみたいなものもあるけど、私も手伝うからさ。」

カイト

「カノンノさん・・・うん、わかった・・・アンジユさん。いますぐに試験をお願いします。」

アンジユ

「だめ。」

カイト

「つり?」

アンジュ

「あなたそんな体で試験受ける気? 試験は後日よ。今日はゆっくりねむりなさい。」

カイト

「あ、はい。」

アンジュ

「それじゃあみんな、戻るわよ。」

そういいながら、アンジュを先頭にカノンノ以外は医務室を後にした。

そうしてカノンノはというと・・・

カノンノ

「ねえカイト君。見て欲しい物があるんだけど。」

カイト

「見て欲しいもの?」

カノンノ

「うん。これ・・・」

カノンノはおそらく自分が書いたであろう絵をカイトに見せてきた。

カイト

「これ……どこかで……見たことがある。」

カノンノ

「え？」

カイト

「カノンノさん。これをどこで？」

カノンノはあわてた表情で答える。

カノンノ

「え？えっと……それは、た、たまに頭のなかにみたことないような光景が広がって、その見え

た風景を筆でなぞって、書いたのがこれらの絵なの……でもこれを見たことがあるって言う人はカ

イト君が初めて……」

そのカノンノの表情はどこかうれしそうなものがあった。

カイト

「どうした？」

カノンノ

「え？……他の人にも見せたけど、誰もこの風景を知らないの。それに、作り話でしよって、笑われちゃうの……」

カイト

「……作り話じゃねえよ。」

カノンノ

「え？」

カイト

「絶対にこの場所見つけて、カノンさんは嘘を言っていないって証明してやるよ……それにこれは見たことがある気がする。だから心配するな……」

カノン

「あ、ありがとう。カイト君。」

カイト

「あ、あと、カイト君じゃなくてカイトって呼んでくれないか？」

カノン

「え？どうして？」

カイト

「ん〜何でだろ……呼び捨てで呼ばれたいのかな……それとも記憶があつたころはカイトって呼ばれていたのかも。」

カノン

「……うん。わかった。その代わりに私もカノンって呼んで？」

カイト

「……わかった。あらためてよろしく。カノン。」

カノン

「うん。こちらこそ。カイト。」

物語が始まる。

いまここに、龍の騎士と光の騎士とカノンたちの

第1話：試験

カイトside

アンジユ

「それでは最終試験の内容を発表します。」

俺はこれまで採掘、採取などの試験をやってきたが、魔物と戦う機会はなかった・・・おそらく何かの討伐だと思う・・・

アンジユ

「ガルーダをカノンノと一緒に討伐してもらいます。」

カイト

「ガルーダ？」

カノンノ

「空を飛んでいる、鷹みたいな魔物だよ。このギルドに入る際には、みんな討伐しているんだよ？」

カイト

「うおっ。カノンノ？・・・ビックリした。いつの間？」

カノンノ

「今。」

あゝそういえばアンジユさんがなんか言ってたな。カノンノがくるって・・・

カノンノ

「なに？その不満そうな顔……」

カイト

「いや？別に……」

アンジユ

「ンン！！それではちゃちゃっと終わらせてね。カノンノは討伐の報告をお願いね」

カノンノ

「はい。」

咳払い下手！！つか俺が討伐したこと前提で話し進めるなよ。

カノンノ

「行くよ？カイト。」

カイト

「ああ。」

アンジユ

「あら。忘れていたわ。はいこれ。アップルグミとオレンジグミよ。3つずつ入っているから。」

カイト

「……なぜグミ？」

アンジユ

「そんなことも忘れたの？このグミは、体力回復もあるのよ。」

知らなかった。

アンジユ

「それじゃあがんばってね。」

カイト

「ああ。まかせろ。」

ルパープ連山

ルパープ連山につくと目の前にオタオタがいた。俺は背中にある剣を取り出した。

カイト

「俺が前にいく。後方支援よろしく。」

カノンノ

「うん。いくよ。」

カイト

「ツハー!!」

俺は剣を振り上げ、振り下ろした。俺の剣は深くオタオタへと食い込み、オタオタは怯んだ。

カイト

「襲爪雷斬！！」

オタオタは塵となって消えた。

カイト

「次！！」

カノンノ

「ライトニング！！」

俺がもう1体のオタオタの方へいこうとすると、カノンノが1発でオタオタを倒した。

カノンノ

「チエンジ！！」

カイト

「ああ。」

俺たちは前と後ろを入れ替わる、これは俺たちがここに来る前に決めたことで掛け声に合わせて、前後衛入れ替わって、戦闘の負担を和らげるというものだ。

カイト

「詠唱に入る。フォローを頼む。」

カノンノ

「分かった。獅子戦吼！！」

カノンノの膝から獅子のオーラが飛びでて、オタオタは2匹とも

ダウンした。

カイト

「下がれ!!ヒヤダルコ!!」

地面から氷が飛び出しオタオタは消えた。

カノン

「ナイス、カイト。でもさっきの術何？見たこともなかったけど・・・」

カイト

「記憶喪失の俺に聞くなよ。って・・・ガルーダってあれ？」

カノン

「え？」

見るとそこには、ガルーダと思われる魔物が4体いた。

カノン

「嘘・・・なんで・・・いつもは1体だけなのに・・・」

マジかよ!!ってことはなに？俺だけ難易度高いじゃん・・・でも

カイト

「ちようどいい。オタオタじゃあ飽きてきたところだ。頼むぞ。カノン。」

カノン

「カイト……うん。行くよ!!」

カイト

「ああ。」

それを合図に俺は駆け抜けた、すぐさま3連撃を繰り出し、

カイト

「虎牙破斬!!秋沙雨!!鳳凰天駆!!」

ガルダを切り上げ振り下ろしの連撃、連続で突き自分ごと切り上げ、炎を纏って空中から突撃する。

4体いるガルダの1体は消えた。

残り3体。そう思った矢先、残りのうち2体は俺の方へ、もう1体はカノンノのほうへ向かった。

カイト

「守護方陣!!」

カノンノ

「虎牙破斬!!虎牙連斬!!」

カイト

「魔神剣!!」

各々が技をだし、下がる。

カイト

「ラナリオン!!!」

俺は雷雲を魔力で作り返した。

その俺の意図をつかんだのか、カノンも詠唱を開始する。

そしてガルダは3体が同じところに集まった。

カイト

「ライディン!!!」

カノン

「ライトニング!!!」

2つの雷が俺の剣を纏う・・・そして腰を低くし、剣を裏手に持ち替え、構える。

そしてガルダは3体で突進してくる。

カイト

「くらえ!!!ライディンストラッシュ!!!」

横に大きく伸びる衝撃波が現れ、ガルダを飲み干した。

カイト

「やった・・・のか・・・」

カノン

「おめでとう。これであなとも私たちアドリビトムの一員よ。」

カイト

「い、い……いやったあ……!!」

第1話：試験（後書き）

すみません。手違いで第1話がどっかに飛びました・・・

第2話：絵

三人称 side

カイト

「魔神剣・双牙!!」

カノンノ

「グレイブ!!」

エミル

「穿孔破!!」

マルタ

「フォトン!!」

ここはコンフェイト大森林・・・プチプリ10体の討伐依頼を受け、ここにきた訳だ・・・ちなみに今10匹目を倒したところだ。

マルタ

「それにしても2人は息がぴったりだよな」

エミル

「うん。こんなに息が合うなんてすごいよ。」

カイトがアドリビトムに入っただけで半日がたった。いまではよくこの4人でクエストに行く機会が多い・・・なかでも、カイトと

カノンノのコンビは流れるような連携をとるほどだ。もちろん、エミルとマルタのコンビもすごい連携だ。だからこの4人でチームを組んでいるというわけだ。

カイト

「何行つてんだよ。2人の愛の連携にはかなわないよ。」

カノンノ

「本当。お似合いだね。」

マルタ

「でしょ。やっぱり私はエミルと・・・ノノノ」

エミル

「ちょっとマルタ!? 何いってんのさ! あもっ、早く帰ろっ。」

「

マルタ

「あ〜ちょっと〜エミル〜」

追いかけていくマルタを見てカイトとカノンノは微笑んだ。

アドリビトム 展望台

カイト

「ん〜……………」

カノンノ

「どう？カイト。」

カイトは今カノンノが書いた絵を見ている。

カイト

「…………やっぱりどこかで見たことはあるんだけど…………それがどこがまではわからないなあ〜」

カノンノ

「そう。」

カイト

「ごめんな。力になれなくて。」

カノンノ

「ううん。それはこっちのセリフだよ。」

カイト

「え？」

カノンノ

「私の絵で、カイトの記憶が戻ったらって思ってるの……………だから……………」

カイト

「…………ありがとう。カノンノ。」

カノンノ

「どういたしまして。」

そんな2人に水を差すかのようにあの2人がやってきた。

エミル

「カイト!!!ひと勝負やるぜえ!!!」

カイト

「エミル!?!つかなんでラタトスクモードなんだよ!!!」

マルタ

「エミル〜がんばって〜」

カノンノ

「ねえマルタ・・・何があつたの?」

マルタ

「え?エミルが水と間違えて酒を飲んだところに、カイトって強いよね〜って言ったら、『俺がカイトをぶつつぶす!!!』ってなつただけどいまいちよく分かんなくて。」

カイト&カノンノ

「(絶対それが原因で普段のエミルが落ちたんだ)」「」

カイト

「つちしょうがねえ!!!やるしかねえか。」

エミル

「行くぜ！！カイト！！」

カイト

「きやがれ！！エミル！！」

2人はほぼ同時に駆け抜けた、しかし技は使わずに単純な剣術と体術で勝負している。お互い一步も引かない。先に動いたのはエミルだ。

エミル

「崩蹴脚！！」

カイト

「つち。烈破掌！！」

空中に飛んで蹴りを繰り出したエミルに、カイトは剣を持っていない左手でエミルの足に合わせるように突いた。

エミル

「瞬連刃！！雷神烈光刹！！」

素早い3連撃から斬り下ろし、連撃で相手を攻撃し斬撃と共に素早く相手の背中に回り込んだ。

だがカイトはこれを剣で受け流すようにすべて耐えた。

カイト

「次は俺の番だ！！魔神剣！！魔神剣・双牙！！魔神連牙斬！！」

カイトは計7発の衝撃波を打ち込んだ。それをすべてかわしたエミルだったが、

カイト

「イオラ!!」

エミルを中心に小さな爆発が数多く起こった。

これをエミルは前転でやり過ごす。

エミル

「魔神剣!!」

カイト

「魔神剣!!」

お互いに放った衝撃波が交わり、相殺する・・・時間にして1秒にも満たない間にエミルはカイトへと迫った。

エミル

「鳳翼旋!!秋沙雨!!虎咬裂斬刺!!」

カイト

「何!?グアア!!」

前方に跳躍しつつ2度斬り上げ、連続で突き、切り上げながら自分も跳躍する。そして回転斬りで上昇しながら最後に衝撃波を放った。

カイトははるか向こうへと吹き飛ばされた。

エミル

「獣招来!!」

マルタ

「ちょっとエミル!!勝負はついたじゃない!!」

エミル

「何いってやがる・・・まだ勝負はついてねえぞ。」

マルタ

「え？」

見るとそこには多少傷がついているものの、まだポンポンしているカイトが立っていた。

カノンノ

「カイト!!」

カイト

「いってゝな。まさか相殺した後すぐにくるとは思ってた
ぜ!!」

エミル

「フン。まだ行くぜ!!魔王地顎陣!!」

カイト

「甘え!!蒼龍滅牙斬!!」

エミル

「なに！？これを相殺しただと！？」

カイト

「どこ見てんだよ。」

エミル

「！！！」

カイトはエミルの懐に入った。そこで流れるような連続コンボを叩き込んだ。

カイト

「瞬辻剣！！雷神剣！！風雷神剣！！爪竜連牙斬！！」

疾風のように突き、さらに突き雷を落とす、前の2つの複合技を繰り出し、さらに剣と拳や足を交互に使って切り、叩きつけていく。そして最後に巨大な真空波で切り刻んだ。

カイト

「幻魔衝裂破！！」

先ほどカイトが吹き飛んだように、エミルもとんだ。

だがエミルはすぐに立ち上がった。

エミル

「俺は負けるわけにはいかない！！ウオオオオオ！！」

瞬間エミルの周りに様々の色の光の円が現れる。オーバーリミックスだ。

カイト

「上等！！かかってきやがれ！！」

エミル

「空牙衝！！雷神烈光刹！！」

跳躍して斜め下に針の様な衝撃波を何本も同時に放ち、連撃で相手を攻撃し斬撃と共にカイトの背中に回りこんだ。すべてを受け流したカイトだが

カイト

「（まずい。喰らうー！）」

獣招来でスピードが上がったエミルにはここまでが限界だった。

エミル

「魔王獄炎波！！この一撃で・・・沈め！！」

カイト

「グアアアアアアアア！！」

カイトは滅多切りにされ後ろの回りこまれ湧き上る炎に飲まれた。

カイト

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

エミル

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

カイト

「これで決めてやる！！煌け！！龍の力よ！！」

カイトもオーバードリミッツで対抗する。その時、彼の右手の甲に竜の顔のような紋章が浮かび上がった

カイト

「これが俺の秘奥義の1つだ！！ライディン！！」

カイトの剣に雷が降り注いだそしてその帯電している刀を鞘に収めた。

エミル

「なにをしている？」

カイト

「それはお楽しみみてことで・・・お互いこれで最後にしようぜ。」

「

エミル

「ああ。」

エミルは剣を裏手にもち、静かに腰を落とした。そして闇のオーラを剣に収束させていく。

カイト

「(4・・・3・・・2・・・1・・・)！！」

勢いよく剣を抜いた、その剣は雷の力がよりいっそう高まっていた。そして剣を裏手に持ち替え、気を高めていく。

エミル

「これで終わりだ！！アイン・ソフ・アウル！！」

カイト

「集え雷光！！今、すべての力を解き放つ！！ギガストラッシュ
！！」

光と雷の衝撃波がぶつかった、威力は互角。次の瞬間、大きな爆
発と共に2つの衝撃波が弾けとんだ。

マルタ

「・・・引き分けだね。」

カノンノ

「・・・うん。」

船の両端には爆発で吹き飛ばされた2人がいた。

カイト

「う・・・つく。」

エミル

「う・・・ん・・・あれ？こじは。」

マルタ

「エ〜ミ〜ル〜？」

エミル

「え？どうしたの？マルタ。そんな怖い顔して・・・」

マルタ

「君のせいで大変だったんだからね!!」

エミル

「え?え?」

カイト

「ちょ・・・マルタ、落ち着け。エミルも悪気があったわけじゃねえし。」

マルタ

「フォトン!!」

カイト

「つぐ。」

マルタ

「さあはやくきなさい。ちょっと話があるの。」

エミル

「ちょ?マルタ。やめ、うわああああ・・・」

カイト&カノン

「・・・」

しかし・・・カイトの紋章は勝負が終わったときには消えていた。

紋章が浮かびあがっていたことはカイトを含め、だれもわからない。
・
・
・

第3話・光（前書き）

あけましておめでとういっせいでます。

第3話：光

カイトside

カイト

「え？村人の護衛？」

カノンノ

「うん。いいかな・・・」

カイト

「ああ。もちろん。」

カノンノ

「ありがとう。」

カイト

「場所は？」

カノンノ

「ルバール連山だよ。」

カイト

「それじゃあ30分後に出発でいいか？さっき依頼から帰ったばかりで、準備できてないんだ。」

カノンノ

「わかった。30分後ね。」

俺は自室へと戻り、名前を知らない剣を手にとった。その剣は柄頭には小さな赤い宝玉の回りを囲むように白い金属・・・オリハルコンで覆われている。握りは茶色の皮を螺旋状に巻き上げている。鏢はまるで竜の翼のように、対になっている白い金属を支えるかのように中央に赤い宝玉が輝いている。刀身は反りのない、真っ直ぐな剣で両刃。血溝は鮮やかな淡い蒼色をしている。

カイト

「・・・護衛って難しい仕事をさせるよな。あいつ・・・」

そしてボックスの中からアップルグミ、スペクタクルス、オレンジグミを6つずつ取り出し、ホールへと向かった。

ホールにはもうすでにカノンノがいて、俺を待っている様子だった。

カイト

「悪い。遅くなった。行こうぜ？」

カノンノ
「うん。」

数時間後

カノンノ
「今回の仕事はこれで終わりよ。船に帰ろう?」

カイト
「なんか物足りないな・・・」

カノンノ
「しょうがないよ。護衛ってほとんど魔物が襲ってきた場合のみに対処するような仕事だから・・・」

そのとき大きな光の塊が俺たちの頭上を通過して行った。

カノンノ
「何だろう・・・」

カイト

「あれは……」

俺は考えるよりも先に走り出していた。その光に向かって。

カノンノ

「カイト!!!……迎えが来るまで時間がある……追いかけてよう。」

カノンノ

「何……光……?」

カイト

「……人だ。空から人が……つて俺もか。」

その人はゆっくりと降りてきた……

数分後

すぐに光の中にいた少年は目を覚ました。

カノンノ

「気が付いて良かった。空から光と一緒に降りて来たんだもん。すっごく驚いたよ！あれは、何かの魔術なの？」

???

「魔術？」

カイト

「覚えてないのか？俺と一緒にだなあ……」

俺は自分に言い聞かせた。

カイト

「お前空から落ち……じゃなかった。空から降りてきたんだぜ？」

???

「空……から？本当に？」

こりゃあマジだな。

カイト

「自己紹介がまだだったな。俺はカイト・バナージ。こつ見えて記憶喪失なんだぜ。」

カノンノ

「自慢になってないよ。あ、私はカノンノ・グラスバレー。よろしく。」

シュウ

「僕はシュウ、シュウ・コードウエル。」

カノンノ

「シュウ……いい名前だね。」

さて自己紹介がすんだところで

カイト

「うし。山を降りるとするか。」

カノンノ

「え？もつ？」

カイト

「ここにいと危険だろ？もしものときを考えて早く降りよう。」

カノン

「うん。そうしようか。」

おっと・・・忘れるところだった。

カイト

「シユウも来いよ。」

シユウ

「え？」

カイト

「いいから。どうせ俺みたいに行く当てがないんだろ？それにお前とは始めてあった気がしないしね。」

シユウ

「うん・・・ありがとう。」

カイト「
いって。いって。」

山を下ろすかとしたその時……

???

「ゲワアアアアア!!」

カイト

「あいつは!?!」

俺が問うたのと同時にみんなが上を見る。そこには大きな竜がいた。

カノンノ

「ワイバーン!!」

シュウ

「なに?あれ……」

つち。やるしかねえ!!

次回「竜を討伐せよ」

第4話：逃亡

三人称 side

カイト

「シユウ！！やれるか？」

シユウ

「後方支援は任せて。」

カイト

「わかった。カノンノ、俺とお前で前で攻めるぜ。」

カノンノ

「それが1番の戦術ね・・・」

3人は今ワイバーンの目の前にいる・・・どうしているかは不明だが彼らの前に降り立っている。逃げようにも道を塞いでいて逃げられない。

カイト

「ツフ、ツハ、ツシー！くそ、やっぱり硬い・・・」

俺の3連撃が弾かれる。

シュウ

「いくよ。ファイアボール!!」

3つの火の玉がワイバーンへと向かっていく。火の玉はかなりの効果があったらしく仰け反った。

カイト

「いまだ。火炎烈空!!獅子戦吼!!」

カノン

「獅子戦吼!!」

裂空斬に炎を追加した攻撃で襲い掛かり、カノンと一緒に獅子戦吼を放って、ワイバーンはダウンした。

カイト

「シュウ!!1発かましてやれ!!」

シュウ

「まかせて。ストーンブラスト!!イラプション!!」

小さな石の塊をたくさん召還してワイバーンへと叩きつけ、火山の噴火で起こったような溶岩流を出現させる。

カイト

「俺も・・・メラゾーマ!!」

シウウ

「エクスプロード!!」

カノンノ

「エンシエント・ノヴァ!!」

3人の巨大な炎の塊、爆発、浄化の炎でワイバーンを飲み込む。

これで決まったと思った時、

炎の中から、ワイバーンは天に向かって何かを打ち出した。

カイト

「え？」

天に打ち出されたそれは、空中で分散し、俺たちへと降り注いだ。

カイト

「全員伏せる!!」

ワイバーン

「ゲワアアア!!」

隕石のようなエネルギー波が俺たちの眼前に広がった瞬間、

俺の右手の甲に紋章が浮かび上がった・・・

カイト

「煌け!! 龍の力よ!! 守護氷槍陣!!」

俺の周りを中心に魔法陣から氷の槍をじめから打ち出した。その槍は隕石を飲み干した。

カイト

「シュー!! カノン!!」

シュー

「うん。フォローお願い!!」

カイト

「ラナリオン!!ライディン!!」

自分の剣を天に掲げ、その剣に雷を落とす。

カノン

「いくよ。シュウ君」

シュウ

「うん。」

カノン&シュウ

「天光満所に我はあり黄泉の門ひらく所に汝あり出でよ、神の雷!!」

ワイバーンは詠唱中の2人に向かって突進していく。

カイト

「させるか!!ライディンストラッシュ!!」

カノンノ&シュウ

「インディグネーション!!」

俺の雷撃と神の雷が当たった瞬間にワイバーンは吹き飛んだ。

カイト

「今だ!!逃げるぞ!!」

・・・溪谷下流・岩場

カノンノ

「はぁ・・・はぁ・・・何とかなったみたいね。」

シュウ

「うん・・・そう・・・だね・・・」

カイト

「2人とも・・・もうすぐ・・・船が来る・・・ぞ・・・」

俺を含めて3人ともボロボロの状態だ・・・疲労困憊・・・だがみんな怪我はなかったのがせめてもの救いだ。

カノンノ

「船に乗ったらあなたの希望する場所に送ってもらえる様に伝えるからね。」

シユウ

「希望する場所って言われてもなあ・・・」

カノンノ

「どこかに行こうとしていたんでしょう？だからここに・・・じやないの？」

シユウ

「えっと・・・本当のこと言うと・・・自分の名前以外はよくわからないんだ・・・」

カイト

「まさか記憶喪失!？」

カノンノ

「嘘お!!--!」

びっくりした・・・まさか俺以外に記憶喪失のやつがいたとは・・・

カイト

「と、とにかく、俺のときみたいに船に招待しようぜ？」

カノン

「え？あ、うん。」

シユウ

「なんか・・・ごめんね。カイト・・・」

カイト

「いって。さっきも言ったろ。お前とは始めてあった気がしないってな。」

おっ・・・船が来た。

カイト

「それじゃあ改めて、・・・」

カイト&カノンノ
「「よつこそ。バンエルティア号へ!」」

第4話・逃亡（後書き）

ディセンダーです。次回はキャラ紹介といきます。

キャラ紹介

カイト

「オリキャラのキャラ紹介をします!!」

シユウ

「てかやるの遅くない？」

カイト

「それは・・・お前の登場が遅いんだよ!!」

シユウ

「何言ってるの!? これでも原作入る前10部作くらい入れてから僕を出す予定だったのに、待ち遠しくて早く出したんだよ? 主人公の君だって登場したのは2部作目からじゃないか!!」

カイト

「知るか!! 俺だって記憶喪失でしかも空から落ちたくなかったよ!! 以外と落ちたシヨックで記憶喪失なのかもな!!」

シユウ

「それこそ知らないよ!! テイルズオブザワールド レディアント マイソロジー2のディセクターみたいに登場して、一体なんの意味があるんだ!!」

カイト

「作者が言うには意味はきつちり意味があるらしいよ？無駄に登場させるのが早くなった君と違ってな！！」

カノンノ

「獅子戦吼！！」

カイト&シュウ

「「ギャア！！」」

カノンノ

「なにをしているのよ……まったく、あなたたちの紹介なんだから……」

カイト

「う……悪い……シュウ……」

シュウ

「ううん。僕こそごめん……」

カノンノ

「それじゃあキャラ紹介に行きますか！！司会は私、カノンノ・グ

ラスバレーと」

カイト

「この俺、カイト・バナージと」

シュウ

「シュウ・コードウエルがお送りします。」

カイト

「まずは誰のキャラ紹介なんだ？」

カノン

「もちろん、カイトからよ。一応この小説の主人公なんだし、」

シュウ

「というわけで、プロフィール!!」

カイト・バナージ

空から落ちてきた少年。年は見る限りでは16程度。船に落ちる前の記憶がない。非常に負けず嫌いだが、感情をあらわにすることは少ない。髪の色は淡い蒼、長さはフレンくらい。瞳は黒。服装は黒いジーパンに白のシャツ、そのうえに赤と黒のチャックの服を羽織って、そのうえに黒のフード付のロングコートを重ねて着ている。

戦いの途中でピンチになると、右手の甲に紋章が現れ、爆発的に強くなる。魔法を剣に纏って、その状態で鞘に入れると、限界まで威力の上だった魔法を纏った、魔法剣となる。職業は魔法剣士？

使える技

魔神剣 魔神剣・双牙 魔神連牙斬 襲爪岩斬破 虎牙破斬 虎牙連斬 烈破掌 瞬辻剣 雷神剣 風雷神剣 爪竜連牙斬 幻魔衝 裂破 裂空斬 火炎烈空 秋沙雨 飛天翔駆 鳳凰天駆 守護方陣 蒼龍滅牙斬 緋凰絶炎衝 斬空天翔剣 大地斬 海波斬 空裂斬 ライデインストラッシュ

術

メラ メラミ メラゾーマ ギラ ベギラマ ベギラゴン ヒヤド
ヒヤダルコ ヒヤダイン マヒヤド イオ イオラ イオナズン
ラナリオン ベホマ ベホマラー ベホマズン ザオリク ライ
デイン ドルオーラ

秘奥義？

「集え雷光！今、すべての力を解き放つ！！ギガストラッシュ！！」

秘奥義？

「右手に眠る龍の炎！左手に宿りし創造の氷！2つを合わせて・・・
メドローア！！」

秘奥義？

非公開

シュウ・コードウエル

光の中から現れた少年。年はおよそ16程度。カイトと同じく記憶がない。ほとんど他人を怒ることはない。髪の色は燃えるような紅服は、青のジーパンに、青のTシャツの上に白のパーカーを着ている。シュウには共鳴というものを使うことができ、パートナーと完全に息を合わせることが可能。(カイトも多少出来るが、シュウほどではない) 職業はビジョップ？

使える術

アイシクル アイシクルレイン アイストーネード スプラッシュ
スプレッド メールシュートローム ファイアボール ファイアス
トーム イラプション エクスプロード ウインドカッター エア
スラスト サイクロン ライトニング サンダーブレード ゴッド
ブレス インディグネーション デルタレイ フォトン プリズム
フラッシュ ホーリーランス レイ ジャッジメント ファースト
エイド ヒール ナース リザレクション ホーリーソング デイ
スペル レイズデッド デイバインジャッジメント ビッグバン
メテオソオーム

秘奥義？

「これが僕たちとの力の差だ！！！！インディグナイト・ジャッジメ
ント！！！」

秘奥義？

「聖なる鎖に抗ってみせよ・・・シャイニング・バインド！！！」

秘奥義？

お楽しみに

カイト

「なんだよお楽しみつて!!」

カノンノ

「あれ？重大発表忘れてた。」

カイト

「俺の話し聞いてくれよ……」

シユウ

「それでは発表します……え〜と……『カイトとシユウのW主人公に変更します』!？」

カイト

「やったぜ〜!!シユウと一緒にか。」

シユウ

「ちよつとくつつかないでよ。」

カノンノ

「今回のキャラ紹介は後々、変更及び追加事項等があるのでこまめ

にチェックしてください。それではまたの番外編で!」

カイト&シュウ「あ!言われた!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9968z/>

テイルズオブザワールド レディアントマイソロジー 3 ~ 龍は閃光のように

2012年1月3日01時46分発行